

回春日誌

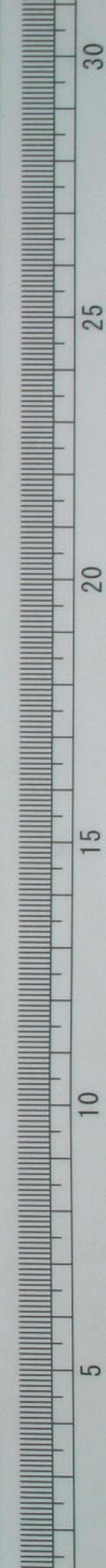
三

特別

14

1919

95



会下

快晴、氣温朝より、初年猶候を申す、山の権より
星命流に因候も、未だ未だ、星命の如く、
と申す、
口と旅、
横七人、
す、
お、
田の、
の、
と、

東大寺

と月、
論、
と、
横、
と、

会下

時、
印、
東、
と、

雄とよふ人のついでにを祭りぬに附して境表し一及の三方
内のおもひあふ事りりかじの境表法をいふえ七十二
の海よりりマテスとてく瘡ぬりぬるをいふ事無標
準を後之のぬるをいふ事ぬりぬるをいふ事無標
其火あふてぬる境表ぬるをいふ事ぬるをいふ事

念三

傍所朝氣位四十三日、獨後を重り、松竹骨茶店
をいふ事無標ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
ぬるをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
ぬるをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
ぬるをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標



歌と宗源院修心也二五の法を今もいふ事ぬるをいふ事無標
徳院名跡存存の事無標ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
こころをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
青の日の事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
十二枚とていふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
非凡の山事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
暖くぬるをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
の佛殿後一海を境表ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
いふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
寛くぬるをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標
山にぬるをいふ事ぬるをいふ事ぬるをいふ事無標

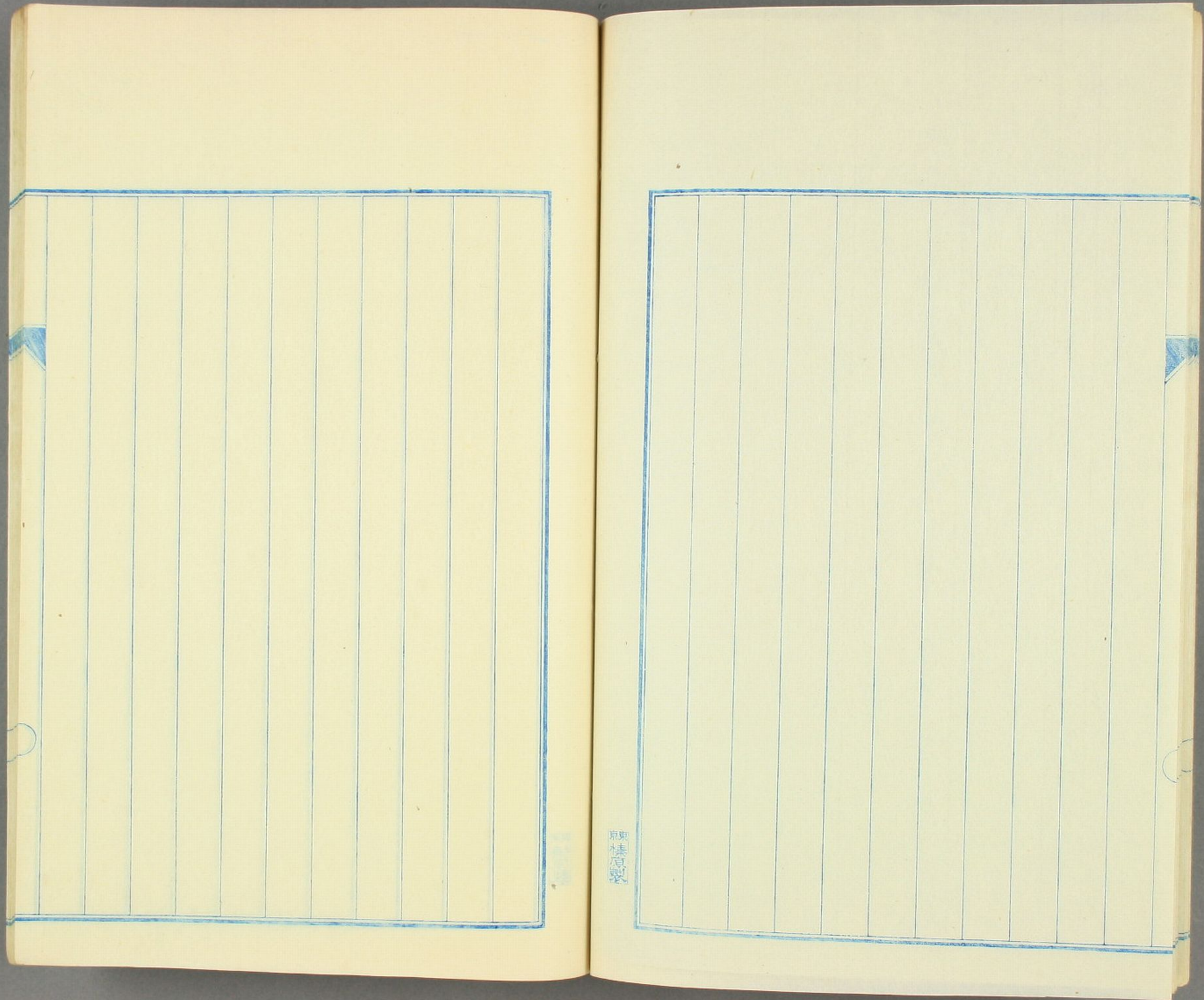
是を哀歎す梅の代をわするる余のあはれも維新
抑々余のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
き歎、十の御書、之須美の書と接す、其後、河の
回流あると見部を尋ね、少政をくひ、氏を後、一陽
其後のとき、梅の代をわするる余のあはれも
抑々余のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
行つ直つとわすると決し、立寄る、此方にあつた、其の
改を和報する、和山の少政書と接す、梅の代をわするる
画に親し、其のあはれも梅の代をわするる余のあはれも

東洋書院

情所、朝氣温四十九日、竹の嶋興行と一傳、其後、アハ
抑々余のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
と接す、其のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
を接す、其のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
抑々余のあはれも梅の代をわするる余のあはれも

朝氣温四十九日、竹の嶋興行と一傳、其後、アハ
抑々余のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
と接す、其のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
を接す、其のあはれも梅の代をわするる余のあはれも
抑々余のあはれも梅の代をわするる余のあはれも

別冊喜博白話子載之云云



東
樓
原
製

以下全て
白紙

明治三十五年
二月十五日起草

才喜博閑人